

おわりに

今年度の研究は、従来と毛色と違う研究であることは、はじめに述べました。例年、当一橋大学鉄道研究会の研究誌をお読みくださっている方には違和感をおぼえる内容だったのではないのでしょうか。しかし、まもなく創設から50年を迎える当会が、なぜ長きに渡って活動できたのでしょうか。種々の理由はあると思いますが、鉄道が持つ趣味としての魅力が普遍的であることが大きなものであることは確かです。

今回、その底知れぬ魅力を秘めた鉄道趣味を取り扱いました。しかし、この鉄道趣味と鉄道ファンに関して、本誌が述べるのが出来たのはほんの一部です。まだまだ、我々は鉄道趣味という広大な海の渚で戯れる童子のようであり、みちていく汐、ひいていく潮にはなすすべもありません。とはいえ、ここそこで戯れる仲間たちには、ゆっくりと近づけたのではないのでしょうか。

「汽笛一声新橋を」から、「My First Aomori」まで日本国内だけでも鉄道は人の流れと共に北へ、南へ延び、鉄道ファンは未踏の地を求めて縦横無尽に走り回ります。そんな彼らは、日本人の誰より地域や風土、故郷に愛着を持ち、その雅を楽しむ人々なのかもしれません。とはいえ、彼らの雅は万人共通のものではありません、時に他人の日常に分け入る邪なものになります。なお悪いことに、鉄道ファン同士でも雅の性質が異なることもあるのです。

このような「雅」と「邪」を明らかにし、鉄道ファンもそうでない人も、「鉄道というメディアを純粹に楽しむことができる」という大団円を、我々は迎えたい。そのためには、結局双方共に歩み寄りを求めるしかありません。我々は鉄道趣味の、歴史や分野を述べることから着手しました。研究という表題に対して単純なことかもしれませんが、「趣味の歴史」という普段意識しないパースペクティブから歴史や社会を眺めることになりました。

つぎに、鉄道ファンの一挙手一投足を探るためインターネットを通じてアンケート行いました。幅広い回答がよせられ非常に興味深いものとなりました。この場を借りて回答者の皆様には御礼申し上げます。今回、回答を集めるにあたって、おおいに助けになったのがTwitterでした。ホームページ、ブログでも情報を発信しました。インターネットは、今回の研究における最大の殊勲者といっても過言ではないかもしれません。

では、この役に立ったインターネットが、鉄道趣味と鉄道ファンにどのような影響を与えたか、お考えになったことあるでしょうか。サブカルチャーはどうでしょう？そもそも鉄道に関係あるのか？などなど、思いつきもしない疑問に対して、会員による議論を通して回答を行っています。

また、昨今話題の「鉄道ブーム」のきっかけ、流行。鉄道趣味の濃淡、鉄子など、これでもかと思いつく限りの鉄道趣味と鉄道ファンの話題を掘り下げ、鉄道ファンがなぜ電車を止めたのか、文化的社会的背景にも言及。そして、鉄道趣味文化の正当性・社会性とはどうあるべきか。そもそも趣味に、社会性は必要なのか。研究誌としては、久々の全会員が研究に参加し、充実した誌面を形成することが出来ました。

しかし、冒頭に述べたとおり、ここに著述したことは、鉄道趣味にとっては氷山の一角に過ぎません。水の下に潜む巨塊を暴くには、あなた自身が、本研究誌を媒体として考えを巡らせ、吐き出すことが必要です。すなわち、受動のみならず、能動的に動くことがこと鉄道趣味には求められることではないでしょうか。

最後に、「鉄道ファン実態調査」にお答えくださった鉄道ファンの皆様、個別にインタビューに答えてくださった方々、このほか執筆者に様々なアドバイスを下された方、家族、そして執筆者全員に感謝申し上げます。

ありがとうございました。